学位論文の要約

論文題目　「古典的近代」の「危機」とエルンスト・ユンガーの「詩的政治」
――空間・技術・形態――

申請者　稲葉瑛志

論文要約

本学位請求論文は、ヴァイマル期エルンスト・ユンガー（1895-1998）の思想を、「古典的近代（klassische Moderne）」の「危機（Krise）」に対する応答として明らかにしたものである。歴史学者デートレフ・ポイカートの定義した「古典的近代」とは、1880 年代から 1930 年代のドイツのことであり、進歩思想とそれを後押しする人々の楽観主義が、諸領域での徹底した合理化と世界の技術化をおしすすめた結果、それがかえって激烈な文化批判と反動を誘発し、その声が世界恐慌による経済危機と結びつくことによって、いっきに音を立てて崩れ落ちた時代のことであった。それゆえ、この時代は近代化の徹底がもたらした矛盾や人々の希望と絶望が解消されることなく、かえって先鋭化したときであり、ナチス・ドイツの「前史」としてまとめることのできない独特な時代として特徴づけられる。

本論文が着目するのは、この時代の「危機」が、ポイカートの強調したような経済危機というひとつの実体であっただけでなく、この時代をもっとも特徴づけた言説でもあったことである。そして本論文の主な関心は、近代的要素の集約された「古典的近代」の時代を生きた人々によって、どのような「危機」の言説が紡がれ、そこからいかなる「診断」「決断」「予知」が提示されるのかに向けられている。

ヴァイマル期の「危機」は、近代化の徹底によって先鋭化した政治的・社会的・文化的矛盾に対する「危機」の言説であり、それはとりわけこの時代における急進右派の政治的言説というかたちをとってあらわれた。第一次世界大戦に敗北し、帝政の崩壊とドイツ革命によって政治的基盤が崩れ落ち、社会的不安が蓄積されたとき、彼らの政治的態度は、現状の保守よりも未来の創造へと転回する。こうした時代状況における「危機」の言説は、現状の「偶然性（Kontingenz）」、次なる段階へ移行するための「決断（Entscheidung）」、そして未来の「造形可能性（Gestaltbarkeit）」という意味内容と密接

に結びついていたのである。

ただし、この時代に発せられた言説すべてが本論文における思想的分析対象となるわけではない。なぜなら、「危機」から生まれた確固たる思考法と歴史観をもつ観察者によって書かれたテクストでなければ本論文の多角的な分析に耐えることができないからである。本論文で扱ったエルンスト・ユンガーはその意味において、この時代の「危機」がもたらした複雑さをもっともよくうつしだしていた思想家のひとりであった。ユンガーはこの時代を黙示録的歴史観で把握し、「古い世」の終わりだけでなく「新しい世」の始まりも様々な作品のなかで繰り返し提示していた。また、彼の作品には、戦後社会に蔓延した「危機」の諸現象を、新しい何かを開始するための「好機」として捉える逆転の思考法が一貫してみられた。

以上のことを踏まえた上で本論文は、この時代のユンガーの思想を、ポイカートのいう「古典的近代の危機」とは異なる意味におけるこの時代の「危機」に対する応答として論じた。その際、ユンガーの思想的内実を文学・思想・政治の複合体としての「詩的政治」という観点から把握した。そこから、「詩的政治」の思想の三つの中心的構成要素である「空間（Raum）」「技術（Technik）」「形態（Gestalt）」に着目し、「古典的近代」を生きた思想家ユンガーの「危機」に対する応答を各章で明らかにした。

大きく分けると、本論は二つの枠組みから構成されている。第一章と第二章は「保守革命（konservative Revolution）」思想と「危機」について、第三章から第七章まではユンガーの個別の作品と様々な「危機」についての考察にそれぞれ当てられている。

第一章は、ユンガーも代表的思想家のひとりとして数えられる保守革命の歴史思想を扱った。その前作業として、保守革命が近代化に対する応答という意味においてドイツ保守主義の系譜の「最終段階」に位置付けられることを論じた。「古典的近代」の「危機」の時代に保守主義は、現状の保守する姿勢から未来に保持するに値するものを創り出すという方向に転回した。こうした思想的転回のロジックには、『聖書』からフィオーレのヨアキムの思想を経て近代の西洋思想に連綿と受け継がれてきた黙示録的歴史思想が内在していた。保守革命はこうした歴史思想を思考の根幹に据え、第一次世界大戦の敗北後に顕となった国民国家没落の「危機」に対して、国民国家の枠組みを超える「ライヒ（Reich）」を創出しようと試みた。そしてこうした歴史思想が各思想家の政治的課題と密接に結びついていたのであった。

第二章は、ユンガーの保守革命つまり「新しいナショナリズム（neuer Nationalismus）」

の内実を明らかにした。1920 年代のユンガーの政治文書における主な関心事は国家権力の「危機」をいかにして克服するかという問題であった。彼は数多くの政治文書の公表を通じて、暴力の独占に失敗したヴァイマル共和国のなかで、権威の不在に由来する人々の不安と新たな宗教的繋がりの願望といった社会的情動にうったえかける「新しいナショナリズム」のあり方を模索していた。彼はナショナリズムを「信仰」の位相で理解し、強力な指導者を頂点とする位階秩序を求めた。そこにはたしかに同時代の「政治神学（politische Theologie）」との共通点もみられる。しかしながら、彼はその秩序の実現を、絶対的な新しいものの創設を掲げる特殊近代的な革命に期待したのであった。すなわちユンガーは、過去の神話に範を求めることなく、革命そのものに「新しい人間（neuer Mensch）」を産出するための助産的暴力を洞察したのである。彼の「新しいナショナリズム」はそれゆえ、「政治神学」とは一線を画した「右からのアナーキズム」であった。それは、市民に代わる近代的主体を求めて同時代の表現主義者たちが唱えた「新しい人間」の言説に対して急進右派から発せられた応答であったと位置づけられる。

こうした政治思想を表明したユンガーは、保守革命の代表的な論客として名を馳せる前からすでに社会空間における権威の獲得に関心を示していた。第三章では、このことに着目し、ユンガーの処女作『鋼鉄の嵐のなかで（In Stahlgewittern）』が、「再現前的公共圏（repräsentative Öffentlichkeit）」の復権という「市民的公共圏」の「危機」に対する応答として書かれたことを明らかにした。作者ユンガーは、第一次世界大戦の歴史叙述の不在状況のもとで、前線の真実を知る証人として振る舞い、レトリックを巧みに用いて戦績を際立たせ、自身を名誉に値する人物として様式化した。当時の広範な読者もまた、作者の証言に「真実なるもの」を読みこみ、作者の特権性を承認した。ユンガーは、「前線の秘密」を知りたがる読者の精神的指導者となることで、権威主義的圏域の創出を企てたのであった。すなわちそれは、文学作品を通して、ナチスの「ファシスト的公共圏」とは異なる権威主義的公共圏を読者の前に提示する試みであった。

文学作品を通じてユンガーが向き合ったのは、この時代の社会や政治だけではなかった。第四章では、エッセイ『内的体験としての戦闘（Der Kampf als inneres Erlebnis）』（1922）を取り上げ、19 世紀型の文化体系の「危機」に対峙したモダニストとしてのユンガーの意識を明らかにした。このテクストにおいて前線は、実存的な戦闘の場としてだけでなく、メディア技術の知覚の実験場としても描かれていた。こうした描写の背景には、テクスト成立時のヴァイマル期の大衆文化の影響があった。1920 年代初頭のド

イツは、19 世紀型の文化体系が映画や写真などの新しい芸術の登場によって変革を迫られた時期であった。ユンガーはこうした文化体系の変化を敏感に察知し、作品内に映画の知覚を取り入れた。彼は、保守的感情から大衆の登場を批判しつつ、前線での戦闘を描くに際しては大衆文化から生まれた映画の知覚をパラドクシカルな仕方で採用したのであった。そこには文化体系の再編をめぐる言論空間に参与しようとするモダニストの意識があった。

第三章で論じた作者と読者の関係をめぐる権威の問題は、1920 年代末にユンガーの政治思想としてふたたび前景化される。第五章は、エッセイ『冒険心――第一稿（Das abenteuerliche Herz. Erste Fassung）』（1929）が、議会制民主主義の「危機」に対する応答として書かれたことを論じた。ユンガーは議会制に対して批判的距離を取りつづけた。というのも、黙示録的歴史観をもつユンガーにとって議会制を支持することは、老化した市民社会を存続させることに他ならないからであった。彼はそのため、選挙のような合法的な権力掌握方法に依拠することなく、むしろ法の外から政治的潜勢力を集結させようと試みた。ここにナチ党と「ユンガー・クライス（Jünger-Kreis）」の政治的態度の違いは顕著にあらわれていた。作者ユンガーはこのテクストにおいて、政治的に麻痺した社会を「内戦（Bürgerkrieg）」とみなし、正統性を失った国家に代わるもうひとつの政治的圏域を創出することを企てた。自らを大衆社会に潜伏する「アナルヒスト（Anarchist）」と称したユンガーは、政治的「友」に対してパルチザン闘争を呼びかけ、男性同盟的な「友」の圏の形成を促した。その行為は、精神的指導者としての作者と信奉者としての読者からなるひとつの権威主義的圏域の創出を意味していた。

第四章で論じたように、メディア技術に関心を抱いたユンガーは、1930 年代に近代技術そのものに国際秩序を変革させる革命的力を洞察した。そのとき彼の国家主義的思考は「全地球的（planetarisch）」思考へと転回する。第六章は、ユンガーのこうした思考の転回に着目し、エッセイ「総動員（Die totale Mobilmachung）」（1930）と『労働者（Der Arbeiter）』（1932）を取り上げ、国民国家の「危機」に対する彼の応答を、カール・シュミットの政治思想と比較しながら論じた。「総動員」概念のなかにユンガーが捉えたのは、技術による世界の流動化作用であった。それに対してシュミットは、その概念のなかに技術による権力の集中化作用を捉えた。そして両者は、技術革新による第二の「空間革命（Raumrevolution）」という認識のもと、「全地球的」思考によって新たな政治的空間秩序を構想した。ユンガーは脱領域的「労働空間（Arbeitsraum）」を提示し、シュ

ミットは他方で具体的空間秩序の多元主義的「広域（Großraum）」を提示した。ユンガーの「労働空間」とは、技術化を「全地球的」規模でおしすすめる空間秩序を意味していた。そこに予見されていたのは、あらゆる情報が技術決定論的に自動統制された、グローバルかつ静かな全体主義的支配であった。それに対してシュミットの「広域」とは、モンロー主義の不干渉原則を通じて地球上の様々な領域間の境界設定にかかわる新たな国際秩序を意味していた。それは第一章で論じた保守革命の「ライヒ」構想のひとつに位置付けられる。このように、19 世紀型の国民国家の「危機」を克服するため提示された二人の政治的空間秩序構想は、グローバル化とリージョナル化が「全地球的」規模でせめぎ合う現代の国際秩序を考察するための批判的土台を示すものでもあった。

前章で明らかにした「労働空間」は、グローバル化を限界まで加速させたものとして提示されていたが、そこには技術的近代のもたらした「危機」に対するユンガー自身の批判的洞察も含まれていた。最終章は、技術社会に内在するそうした「腐敗」に対するユンガーの洞察を、『労働者』や『苦痛について（Über den Schmerz）』（1934）で描かれた人間身体の変化から読み取り、「冷たさ（Kälte）」「苦痛（Schmerz）」「有機的構成（organische Konstruktion）」という彼の「政治の美学化」の三つの言説として論じた。道徳的感情を排除した英雄主義的な「冷たさ」には、技術の圧倒的な暴力に直面した者の無力観が投影されていた。身体的「苦痛」を英雄的に耐え抜くために提示された、「新しい人間」のカメラ・アイは、物体の運動だけでなく市民的な共感も排除するものであった。そして、技術によって再編成された人間集団イメージの「有機的構成」は、凍結した有機体つまり死のアナロジーであることを暴露していた。このように、ユンガーは技術的近代のもたらした光だけでなく闇の側面も捉えていた。その意味において、ユンガーのファシスト的美学は、技術社会に内在する「腐敗」の洞察も射程に収めたものであったと結論づけられる。